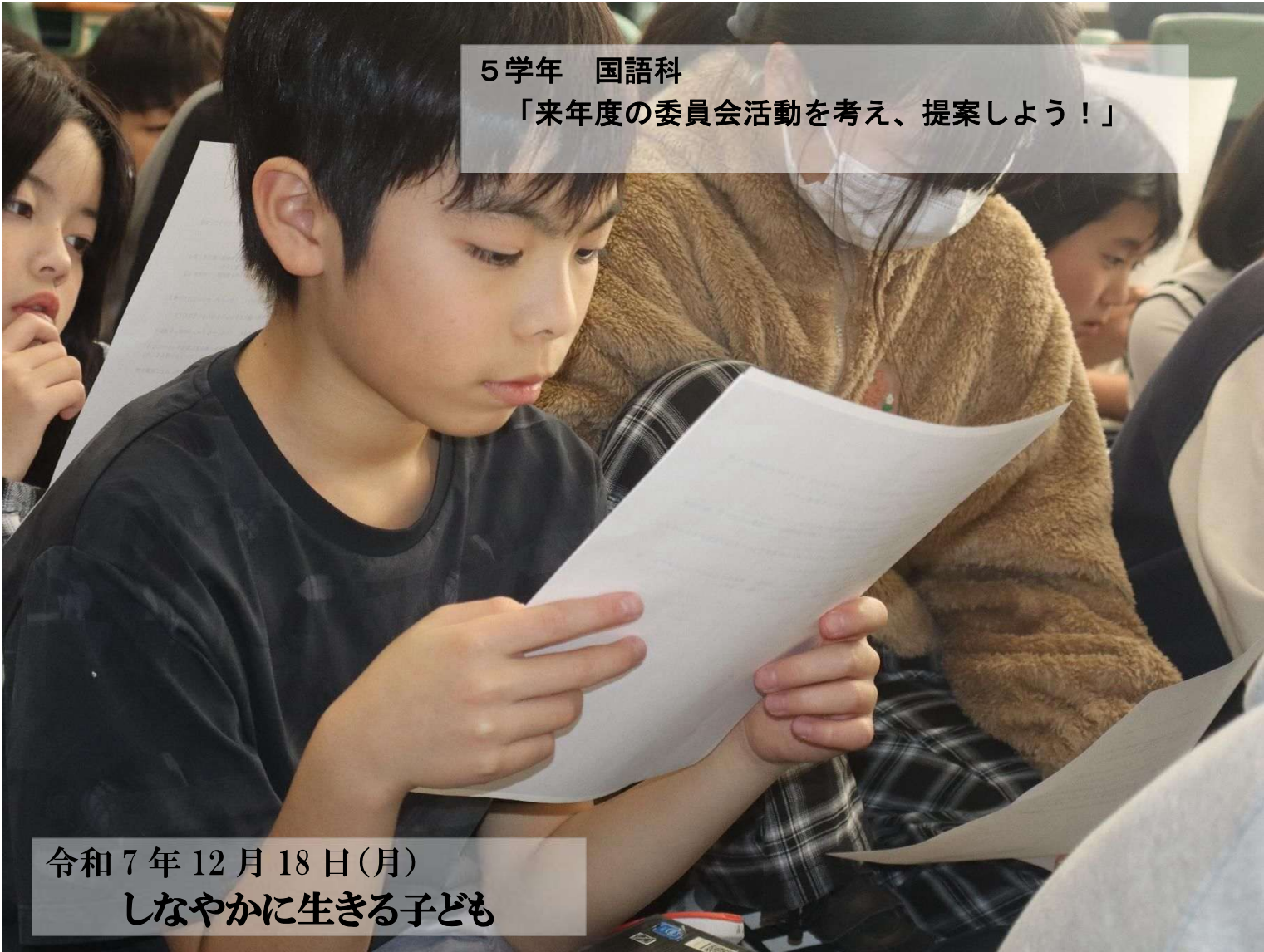




5 学年 国語科

「来年度の委員会活動を考え、提案しよう！」

令和 7 年 12 月 18 日(月)

しなやかに生きる子ども

「モデルの動画みたいに『事実』や『根拠』がないと伝わらない。」

国語科では、日常の思いや課題を、他者との関わりの中で言葉にし直し、よりよく伝えようとする姿を目指します。「来年度の委員会活動を考え、提案しよう！」では、自分たちが本当に実現したい委員会の活動内容を設定するために、委員会担当の教師や担任外、教頭、校長に説得力のある提案をしました。子どもたちは、自分の書いた原稿と「説得力のあるモデル動画」を比較することで、「伝えたい熱意」と「相手が納得する根拠」のずれに気付きました。そこで、独りよがりな文章を修正するために、友達や先生へインタビューを行ったり、アンケートを集めたりして、客観的な「事実」を求めようと動き出しました。他者の声を取り入れ、自分の言葉を更新していく過程で、言葉が相手に届く手応えを感じることができました。

私たちは、自分の意思をもって粘り強く学ぶ力強さと仲間の考えを受け入れながら学んでいく柔軟さを兼ね備えた「しなやかに生きる子ども」を育みます。そのために、他者とながら合い、“うれしい”を見いだす学びを大切にしていきます。多様な個を認め、高め合いながら学べるように「教材化」「教師の立ち位置」の二つの視点から、子ども一人一人を大切にした授業の在り方を探っていきます。

国語科 5年「来年度の委員会活動を考え、提案しよう！」より

視点1

多様な個が生きる教材化

本単元では、子どもたちが「本当に相手に伝えたい」という切実な目的意識をもてるよう、教科書の例文ではなく、自分たちの来年度の生活に直結する「委員会の活動内容の提案」を題材としました。

また、子どもたちが自ら課題を自覚するために、あえて「情熱はあるが、根拠がない動画」と「情熱はないが、根拠が明確な動画」の2つのモデルを用意しました。

比較対象があることで、どの子も自分の作った提案のための原稿と比較し、「自分には何が足りないのか」を具体的に捉えることができました。その結果、感覚的に文章を書くのではなく、根拠や提案の構成を意識しアンケートやインタビューを行ったり、仲間と相談し、見合ったりしながら、よりよいものにしようと修正していく主体的な姿が生まれました。



多様な個が生きる教師の立ち位置

視点2



教師は、正しい書き方を一方的に教えるのではなく、子ども自身が「今のままでは伝わらない」と気付けるように子どもたちをつなげていく立ち位置を意識しました。また、子どもたちのつぶやきを板書に位置付けることでどの子どももその言葉を手掛かりに改善することができるようにしました。

自分の文章の改善点に悩み、停滞している子どもに対しては、教師が答えを出すのではなく、「その根拠はどこにあるかな？」と問いかけ、教室内の友達や、他学年の子どもへのインタビューやアンケートへと視点を広げる支援を行いました。

教師が黒板の前で教え込むのではなく、子どもが学校の先生や他学年、同じ委員会の仲間へと「聞きたい。」「聞かないと。」と思うような環境をつくることで、他者とつながりたいという思いを生み出しました。

国語科 4年「スワンレイクのほとりで」より

視点1

多様な個が生きる教材化

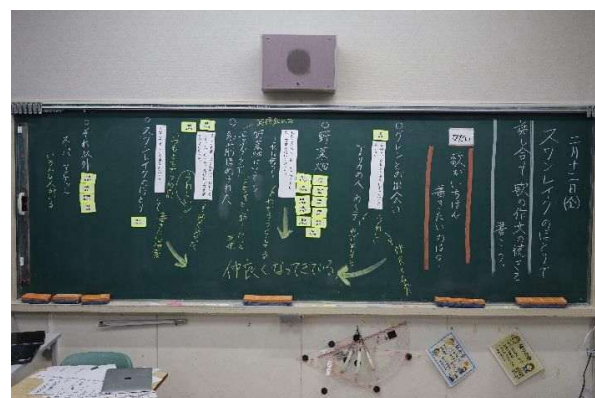
本単元では、主人公の「歌」にとって「一番心に残っていることは何か」を問う学習を設定した。この問いは、着目する場面や言葉、生活経験の違いによって多様な解釈が生まれる構造となっている。そのため、子ども一人一人が読み方によって、「自分はこう考えたい」という必然性をもって言葉に向かうことができる。

前時までには、登場人物の思いを叙述と結び付けて整理してきたことで、同じ場面でも異なる読みが生まれる素地が形成されていた。本時では、自分の考えを叙述と結び付け、交流を通して読みの違いや広がり気付く子どもたちの姿が見られた。さらに、他者との交流を手掛かりに作文の続きを表現する言語活動を設定したことで、子どもは自らの読みを振り返りながら言葉にすることができた。



多様な個が生きる教師の立ち位置

視点2



単元の導入で、教師は学習課題を提示するのではなく、物語を初めて読んだ子どもの感想に耳を傾ける立ち位置をとった。これによって、一人一人の読みが尊重され、多様な解釈が生まれる土台を形成することができた。

本時では、「どの場面の、どの言葉からそう考えたのか。」と問い返すことで、グループの他者と協働しながら、自分の考えを叙述と結び付けて整理できるようにした。また、叙述と児童の考えを結びつけて板書に位置付けることで、他者の読みを手掛かりに自分の考えを見つめ直すことができるようにした。対話は子どもに委ねつつも、思考が停滞した場面では一人一人の問いを焦点化する立ち位置をとった。その結果、子どもは他者との交流を通して自らの読みを更新したり、新たな視点に気付いたりすることができていた。